体操室で

インストラクター：皆さん、とても素晴らしいですよ、気に入りました、
お目覚めですね、元気いっぱいで良いですね。

ミゲル：ロッケフレ、今分かっただろう、見るに値するものだと言うことが?

インストラクター：膝を上げてください、そして反対の手で触れます。分かりましたか？良いですか
私がやるように、こんな形に、見てますか？こんな風に！私がやるように。

年寄：　なに？何といったの？どんな風にやるの？
もっと大きい声で言って！どんな風にやればいいのですか？

インストラクター：手を膝に触れなくてはなりません。。。

年寄：手を触れなくてはならない。。。

年寄：あはは、アウグスチン、耳は悪くなったが、手の方は大丈夫だ。

インストラクター：それでは、次の運動に移りましょう。ボールを使った運動の一種です。
初めはボールを渡す運動です。右側の人にボールを渡します。

アウグスチン：なに？何と言ったの？　聞こえません。

インストラクター：右側の友達にボールを渡さなくてはなりません。

アウグスチン：なに？どうするの？どうしなくてはならないの？

インストラクター：右側、右側の友達に。

アウグスチン：なに？言っていることが聞こえない、何をすればいいのですか？

インストラクター：ボールを渡さなくてはいけません。

アウグスチン：なに？言っていることが聞こえない、もっと近くに来て、近くに、聞こえない。
もう少し近くに。

インストラクター：ボールを渡さなくてはいけません。

アウグスチン：もう少し近くに。

インストラクター：ペジセール、彼に説明してあげて。

ペジセール：ボールを右側の仲間に渡すのだ。

アウグスチン：聞こえるよ、怒鳴るな。

インストラクター：始めましょう、アントニア、急いで渡して下さいね。先週の記録を破りましょう。
用意は良いですか？

アントニア：ここよ、ここよ、エステバン、ボールを取って、ねえ。

エミリオ：彼は目が見えないのか？

ミゲル：そう、昨年、糖尿病で目をやられた。

アントニア：ねえ、良く見て。

男性：上手いよ、アナお嬢さん、

アナ：　ここよ、持って、エステバン。

アントニア：違う、違う、彼女。

アナ：ああ、大丈夫、エウヘニア？

エウヘニア：しかし、私、何にもしないのに、お嬢さん。

アントニア：ああ、ボールが転がって行く！

アナ：ああ。あった、大丈夫、私は大丈夫、エウヘニア、取ってえ。良いわ、次はドロレス、貴女よ。

アントニア：ドロレス、貴女の番よ、目を覚まして。

アナ：モデスト貴方よ、目を覚まして。アウグスチン、急いで取って。

アウグスチン：ああ、どうするのかな。

ペジセール：もっと注意して。
アナ：はい、アウグスチン持って。
アウグスチン：何と私は下手だなあ。
アナ：気を付けて、ペジセール、手伝って、ペジセール。
良く出来ました、皆さん、私達は先週より二分、記録を塗り替えました。拍手、素晴らしいです。
では、今度は反対にしましょう。
エミリオ、ボールを左側の人に手渡してください。
エミリオ：なに、何だって？
アナ：エミリオ、ボール（エミリオには、トレタと聞こえた）を左側の人へ。
ミゲル：エミリオ、ボールを前と反対の人へ。
アントニア：ボールを急いで、記録を塗り替えなくてはならないでしょう。

雨が降っている窓辺で
エミリオ：ボールか、ボールか。
ソル：電話、電話。息子たちは私を迎えにこなきゃいけない。
アナウンサー：息子たちは迎えにこなきゃいけない。息子たちは迎えにこなきゃいけない。
エミリオ：何をしているのだ、あの気の毒な奥さんは電話を捜している、こんな日に外で。
ミゲル：ロッケフエレ、面白いことが起こらないときは、起こさなくてはならないのだ。
何かで頭を忙しくしていないとすぐに失うから。
時には私の後に５人も列を作ることがあった。最後の傘をさした老女を見た？カルミニャは、決して一人ではいない、火星人がやってきて連れて行かれるのを怖がっている。やあカルミニャが走っている。
かなりの偏執狂になるしかないのだ、若さを保つためには、ええ、ロッケフエレ。
エミリオ：私は良くないと思う、残酷な冗談と思う。
ミゲル：ここでは冗談は通用しない、ここでは沈没（破滅）しないでいるかが、最も重要だ。

雪の庭で
ミゲル：やあ、君が私に頼んだお好みのフォックステリヤではないが、どうだろう？
男：そう、可愛いね、大変有難うミゲル。
ミゲル：ねえ、マルティン、君が望む物は何でも手に入れてあげるよ。
マルティン：ああ、できない。
ミゲル：どうした、立ち上がれ
マルティン：中に入ろう、風邪を引くかもしれない。
ミゲル：大丈夫、大丈夫、クリスマスお目でとう。
マルティン：クリスマスお目でとう。
エミリオ：確か、ホームでは犬は飼えないだろう。
ミゲル：飼えないよ、ロッケフエレ、マルティンは部屋に隠しておくと言う、そして週末に息子を訪ねるときに散歩させるという。
エミリオ：おかしいな、もっと大きくなったら、どうするのだろう？
ミゲル：そうだね、マルティンはうっかりやだから、長くは続かないだろう。
エミリオ：へえー。ところで君の髭、サンタクロースのようだね。
ミゲル：ロッケフエレ、毎日同じことを言うね、君、もうっかりやだね、ロッケフエレ。
エミリオ：そうだ、帽子だけがない。

ミゲル：さあ行こう、昼食の時間だ、寒くはないの、外套を着ないで。
エミリオ：私は寒くない。
ミゲル：ねえ、君も髭を生やしてみたら、似合うと思うよ。
エミリオ：いや、いやダメ。